

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

第12回

ロシアの文化的アイデンティティとしての楽器「バラライカ」

ロシア民族音楽教室「マキシム」主宰 クリコフ・マキシム

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト(NipCA)」主催

公開講演会シリーズ

「中央ユーラシアと日本の未来」

第12回

ロシアの文化的アイデンティティとしての楽器「バラライカ」

ロシア民族音楽教室「マキシム」主宰 クリコフ・マキシム

講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」の 講演会記録の刊行に寄せて

白山 利信

筑波大学人文社会系教授・NipCA プロジェクト実務責任者
グローバルコミュニケーション教育センター長

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト（NipCA）」は、2019年1月、文部科学省「大学の世界展開力強化事業（ロシア）」の本学の採択事業「ロシア語圏諸国を対象とした産業界で活躍できるマルチリンガル人材育成プログラム」（2014-2019）の成果とノウハウを引き継ぎ、新たなミッションを担ってスタートしました。初年度を成功裏に締めくくべく残された事業案件を進めていた2020年春、新型コロナウイルスのパンデミックという事態に突然見舞われ、2月下旬の時点で初年度予定していた研修事業や国際学会は中止せざるを得ず、次年度の計画のすべてが変更を余儀なくされました。

新型コロナウイルスが収束しない中で始まった当プロジェクトの2年目ですが、活動形態をオンラインに切り替え、派遣・受入事業を除けば、前年度以上のプロジェクト活動を推進することができました。NipCA プロジェクト主催の公開講演会「中央ユーラシアと日本の未来」シリーズもそうした事業のひとつで、Zoomによるオンライン開催に切り替えて行いました。初年度は計10回開催しました。今年度は、初年度を上回る聴講者（毎回平均して50名）に参加していただきました。聴講者から講演内容が素晴らしいので、冊子として読みたいとの多くの声を頂戴しました。そこで、本プロジェクトの社会貢献の一環として、講演会記録冊子として刊行することにしました。

本冊子に収められているのは、今年度の第2回目、通算では第12回目になる「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会「ロシアの文化的アイデンティティとしての楽器『バラライカ』」の全体を収録したものです。講師を務めていただいた、ロシア民族音楽教室「マキシム」主宰のクリコフ・マキシム先生に深く感謝申し上げます。クリコフ先生のご講演は、ロシアの民族楽器バラライカの成り立ちや歴史に始まり、そこからロシア文化のアイデンティティを考察するという教養溢れる刺激的な内容でした。ご講演では聴講者から次々と質問が出され、議論が白熱しました。またご講演の途中で、クリコフ先生がロシアと日本の名曲をバラライカで生演奏するという、オンラインミニライブも実現しました。残念ながら紙面でその音色をお届けすることは叶いませんが、是非、読者の皆さまには本冊子からリアルなライブ感の一端を追体験していただければと思います。

今年度の講演会はすべて冊子化を予定しております。今後もNipCA プロジェクトの講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」にどうぞご期待ください。

最後になりますが、日頃から筑波大学NipCA プロジェクトを陰に陽に温かく支えて下さっている公益財団法人日本財団の森祐次常務理事、有川孝国際事業部長、ハフマン・ジェイムズ国際事業部課長、そして日本・中央アジア友好協会（JACAFA）のヴルボスキ京子会長に対して、衷心より厚く御礼を申し上げます。

梶山 本日は筑波大学 NipCA プロジェクト主催、第12回「中央ユーラシアと日本の未来」公開講演会にご参加いただき、ありがとうございます。本日、司会を務めます NipCA プロジェクトコーディネーターの梶山です。どうぞよろしくお願いいたします。

本日の講師の先生を紹介させていただく前に、本プロジェクト実務責任者の白山利信教授から、本講演会の趣旨を説明させていただきたいと思います。白山先生、よろしくお願いいたします。

白山 皆さん、こんにちは。本日はお忙しいところ、本講演会にご参加いただきまして、誠にありがとうございます。

筑波大学は日本財団さんから助成をいただきまして、筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」という大型プロジェクトを展開しております。本講演会は、筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」が主催組織となっております。それと同時に学内のグローバル・コモンズ機構、それからスーパーグローバルユニバーシティ事業推進室、グローバルコミュニケーション教育センター社会貢献委員会、そして筑波大学の旧人文社会学研究科、現在は人文社会研究群ですね、地域研究イノベーション学位プログラム、それから学部の人文・文化学群、社会・国際学群が教育組織となっているということでございます。

「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト」では中央アジアと日本を自在に行き来し、当該社会の発展のために活躍できる人材育成に日夜、取り組んでおります。将来のキャリアパスに役立つテーマを選んで、中央アジア出身の留学生たちおよび日本人学生たちが日本の国内事情、中央アジア社会の諸課題、もう少し広く中央ユーラシア社会の諸課題、そして世界の SDGs、持続可能な開発目標の達成に寄与できる取り組みなどをより深く理解するための機会として「中央ユーラシアと日本の未来」と題する講演会をシリーズとして実施しております。今回は第12回目ということになります。

今日の講演会ですが、特に SDGs 達成への貢献とは直接的には関係はないんですけども、中央ユーラシア世界の中核をなすロシア語圏社会の文化に焦点を当てまして、ロシアの音楽文化の理解を深める機会として位置付けております。本日はロシア民族の音楽文化の専門家であり、バラライカの演奏家でもあるクリコフ・マキシムさんをお招きし、実施いたします。バラライカ等のお話に加え、演奏もしていただけるというふうに聞いております。大変楽しみです。

以上ですが、本講演会の趣旨説明とさせていただきます。司会にバトンタッチいたします。

梶山 白山先生、ありがとうございます。それでは、私の方から簡単にクリコフさんの略歴をご紹介したいと思います。クリコフさんは2003年、サンクトペテルブルク国立文化芸術大学をロシア民族楽器のオーケストラの指揮およびバラライカ専攻で卒業しています。在学中はロシア民族音楽アンサンブルのメンバーとしてロシア国内、そしてドイツ、フランスにて公演されておりました。

2004年に日本に来られて、東京藝術大学で日本の伝統音楽の研究を始め、2011年、東京藝術大学音楽文化学専攻博士号を取得されています。現在は、ロシア民族音楽集団「マキシム」を主宰して数々の公演をこなし、NHKのラジオ番組などにも多数出演されています。

本日はクリコフ・マキシムさんに「ロシアの文化的アイデンティティとしての楽器『バラライカ』」と題する講演を、演奏を交えてしていただきたいと思います。それではクリコフさん、よろしくお願いいたします。

クリコフ よろしく申し上げます。皆さん、こんにちは。クリコフ・マキシムと申します。今日は皆さん、本当に暑中、お集まりいただき、ありがとうございます。私はオンライン講演会が初めてなので、楽しくやってみないなと思っていますので、皆さん、最後までどうぞよろしくお願いいたします。本当に不思議な感じなんですけど、黒い画面しか自分の前に見えませんが、僕も緊張していますけれども、アットホームな感じでやってみたいと思います。

本日の講演会のテーマはバラライカという楽器です。何回もお見せしますが、このような楽器です。弦楽器ですね。今日はこの楽器、バラライカを初めて見ている方が多いのではないかと私は思いますが、これはロシアの民族弦楽器ですね。弦は3本あるのですが、楽器自体について、後で説明したいと思います。まずは楽器の音を少しだけ、生でお聞かせしたいと思います。今日は少し演奏もしますが、あとは私自身のことも含め、いろいろな動画も準備しています。動画の画質などを少し心配していますが、まずゆっくり始めてみたいと思います。(演奏)

こんな感じです。皆さん、聞こえているでしょうか。ありがとうございます。とりあえず聞こえるということですね。

今日の講演会のテーマは「文化的アイデンティティ」という言葉を使いましたが、私は「サウンドアイデンティティ」という言葉をよく使います。要するに何かの

楽器の演奏を聴いたときに、これはバイオリンとか、これはトランペットとか、何となく分かりますね。もちろんそれが分かるためにはこの楽器の演奏を前に何回も聴いていることが必要です。例えば琴と三味線のサウンドアイデンティティは全く違います。バラライカとギターのサウンドアイデンティティも違います。

バラライカの文化アイデンティティにはサウンドアイデンティティはもちろん入っていますが、あとは楽器のイメージ、ロシア国内のイメージと海外のイメージも入っており、さらにそれに関する全ての考え方などの要素が入っています。ステレオタイプ、少しネガティブなものももちろん入っています。日本なら、侍、芸者、忍者、お酒などありますが、ロシアもウオッカ、熊、コサックダンス、寒いなどいろいろあります。残念ながら、そのステレオタイプにバラライカも入っています。

先ほどバラライカはロシア民族楽器であると申し上げましたが、この「民族」という言葉も実はとても意味が多く、なかなか分かりにくいと思います。だから、ロシア民族音楽というカテゴリーも割と難しいと思います。ひとまずバラライカをロシア民族音楽のカテゴリーに入れておきましょう。

これからバラライカの歴史について少しお話ししたいと思います。まずは、一番大事なバラライカの分類について一言申し上げます。結論から言えば、現在、ロシアには、バラライカにおいて二つの楽器、二つの音楽的伝統が同時に存在しています。二つの全然違う音楽的伝統ですね。残念ですが、この二つの伝統は共通点が少なく、お互いにほとんどコミュニケーションを行っていません。また、バラライカの二つの違う伝統の存在は今でも、ロシアの中でも海外でもまだまだほとんど意識されていません。

一つ目の伝統はフォークロア。フォーク、民俗バラライカですね（図1）。二つ目の伝統はいわゆるアカデ

ミック、または芸術バラライカです（図2）。私はこの楽器を使っていて、それは私が言う芸術バラライカの楽器です。ロシア語では直訳するとアカデミックバラライカと民俗バラライカという名前になりますが、これは分かりにくいので、今日の講演会では、私独自の区別で、芸術バラライカとフォークバラライカという呼び方をしたいと思います。芸術バラライカというのは音楽学校で長い間、バラライカ実技を習って、舞台上で聴衆のためにバラライカの演奏をしている音楽活動です。要するにプロの演奏活動の世界ですね。フォークバラライカはフォークロア音楽ですから、昔からロシアのさまざまな地方で、農民たちは自分のために好きなように、好きなかたちで弾いたり、使ったりしていました。仲間の歌や踊りの伴奏として楽器を使っていました。極端に言えば、芸術バラライカは市民の文化で、フォークバラライカは農民の文化です。

ここで少しだけ動画を皆さんお見せしたいと思います。もし可能でしたら、フォークバラライカの動画の再生をお願いしたいと思います。

梶山 はい、少々お待ちください。

クリコフ フォークバラライカの演奏です。フォークバラライカは地方によって弾き方、または弾く曲が完全に違います。

（動画再生）

クリコフ ありがとうございます。後でまた詳しい話をしますが、地方によって、このような旋律パターンが繰り返されてずっと長く演奏されるパターンです。

少しだけバラライカの歴史についての話に移りたいと思いますが、もちろん昔からロシアにあったバラライカは先ほどのフォークバラライカです。

ところで、ロシアでは民族楽器の歴史的研究は、残念ながら、とても少ないです。信頼できる資料も少ないです。資料保存自体にさまざまな問題がありましたし、社



図1 民俗(Folk)バラライカ 現在



図2 アカデミック(芸術)バラライカ 現在

会的、政治的な側面もその原因の一つです。例えば日本では師匠から弟子に芸術を伝えるいわゆる家元制度などがあり、そのおかげで多くの伝統は長い間、存続することができました。それぞれの伝統の関係者は楽器や楽譜、その他の資料などを大切に保存して、今でも日本では保存会という共同体が少なくはないです。私は時々「保存命令」という言葉も使います。それは一人の日本人の研究者がつくった言葉ですが、保存命令というのは、結局、自分が所属するグループ、共同体の伝統をできるだけ保存する、どうしても保存するという意味です。ロシアでは家元制度のような組織はなかったために、何かを長い間、保存する共同体が本当に少なかったと思っています。

また、ロシアの宗教、いわゆるロシア正教は昔から音楽文化に大きな影響を与えてきました。教会音楽は、主として歌しかなかったのですが、楽器といますと様々なサイズの鐘でした。とても大きな鐘から小さな鐘まで使いました。その他の楽器は固く禁止され、その上、楽器自体は悪魔の道具とされて、長い間、嫌われていました。

一方、教会の音楽、教会の歌はロシアの昔からの民謡に大きな影響を与えて、ロシア民謡を豊かにしたことも否定はできません。ロシア正教は楽器に対しては厳しかったにもかかわらず、農民たちは楽器を作り、好きなように使っていました。

次は、ロシアの道化師、スコモローヒの画像をお見せしたいと思います（図3）。ロシアの道化師、名前はスコモローヒですが、ロシアの17世紀までは大勢いました。自分のパフォーマンスで歌、踊り、楽器、芝居などをしていました。スコモローヒはよくロシアの正教、宗教をばかにしていたので、教会側から非常に嫌われていましたが、国民には愛されていました。

スコモローヒはドムラという名前の楽器を使ったといわれています。昔のドムラが本当はどんなものだったか、ドムラでどのような音楽が奏でられたか、全く分かっていません。しかし、19世紀末に改良されたドムラは現在もロシア民族楽器の一つとなっています。現在のドムラの姿をちょっとだけお見せします（図4）。ボディは半円で、でも、弦はバラライカと同じように3本です。後ろはこのような感じになっています。このドムラも芸術ドムラになります。歴史的な資料によれば、ドムラという言葉はバラライカよりずっと前からありました。ドムラ楽器は昔からありましたが、ロシアの王様、いわゆるツァーリが1648年に楽器使用禁止命令を出して、ドムラなどの楽器を固く禁止しました。すると農民たちは



図3 スコモローヒ(道化師)



図4 ロシアの民族楽器 ドムラ(改良)

すぐに違う形の違う名前の楽器を作りました。その楽器こそが後のバラライカであるという説が一般的になっています。

バラライカという言葉が資料に初めて出てくるのは1688年といわれています。楽器使用禁止命令から40年、半世紀近くたっています。しかし、楽器の名前だけが資料に出っていますが、どんな形の楽器、どのように弾いたのか、全く分かりません。ただ、何となく、想像することはできます。特に農民たちは、身近にあった材料から好きな形で楽器を作って、好きな音楽、好きなメロディーで遊んだということは間違いありません。それでもフォークロア音楽ですから、とても流動的で楽器の形

も安定していませんでした。

バラライカはどうして、三角形なのか。これはよく聞かれる質問です。バラライカは19世紀の終わりごろ、改良されてその形になり、その後はもうほとんど変わっていません。それまでは楽器の形と大きさ、弦の数はロシアの地方によってばらばらでした。楽器のボディは三角形、四角形、半円型でした。ボディは木からではなくて、カボチャなどの植物から作られたこともありました。バラライカの一つの形が三角形だったという理由は、恐らくそれは農民たちにとって、そのような作り方が一番簡単だったということです。一番普遍的な材料を少なく使って楽器を作る。私もその説を信じていて、事実に近いと思っています。

今度は私が演奏したメドレーの一部分を動画でお見せます。

(動画再生)

今の演奏は芸術バラライカの演奏でした。バラライカという言葉の意味について、いろいろな説がありますが、私は、その言葉はタタール語から来たのではないかと考えています。そもそも昔のロシアはタタール・モンゴル族に13世紀から15世紀に至るまで200年近く支配されたので、いろいろな文化が伝わったのではないかと考えます。タタール語には^{バラール}Балаларという言葉がありますが、これは、子どもたちという意味です。子どものように早く楽しくしゃべるといった雰囲気も含まれているそうです。

ロシア語の立場から見ても、確かにバラライカ楽器は、もともとは真面目な楽器ではなかったですね。簡単にまとめてみれば、昔、バラライカというのは具体的な形の弦楽器ではなくて遊び道具の一つでした。だから形はどうでもいい、弾き方は自由、好きなメロディーと遊ぶということです。バラライカとドムラのような楽器自体もロシアに中央アジアから来たことが想像できます。

ここはまたパワーポイントの画像に戻りたいと思いますが、カザフの民族楽器のドンブラとキルギスの民族楽器のコムズ。これはカザフのドンブラです(図5)。このような形をしています。このキルギスの楽器はコムズですね(図6)。今でも活発にこの伝統が続いています。この楽器はバラライカの仲間なのではないかと私は思っています。どっちが先にできたか分かりませんが、恐らく中央アジアと密接な関係があると思います。例えば先ほど見せたロシアの楽器のドムラは、一つだけ音が違うのですが、カザフのドンブラと名前がほとんど同じです。

しかし、ここで少しだけ申し上げたいことがあるので



図5 カザフの民族楽器 ドンブラ



図6 キルギズの民族楽器 コムズ

すが、私自身はかつて研究活動も行い、今は楽器奏者の立場にいます。あの楽器はもともとどこから来たか。どれぐらい長くある国に存在したのか。そのような問題に私自身は今、あまり興味を持っていないのです。なぜかと言うと、例えばバラライカの場合では、現在、芸術バラライカを見ると、胴の様子を見ても、中央アジアの影響や中央アジアの他の楽器の影響は見られません。影響といっても、今のところはもうバラライカという楽器の名前しか残っていません。ドムラの楽器もそうです。名前だけ昔から残っていますが、楽器の中身は完全にもうロシアのものになっています。

18世紀の中ごろからロシアに、ヨーロッパから芸術音楽が入ってきて、これは、ロシアの貴族階級と少しの臣民が楽しむいわゆる宮殿音楽です(図7)。もちろんこの写真も新しいものですが、大体、こんなイメージだったと想像できます。もちろんこのような宮殿の音楽に農民たちのバラライカは入っていません。この芸術音楽は19世紀になって、ロシア系のヨーロッパクラシック音楽まで発展してきました。

バラライカに関する信頼できる資料は少ないと申し上げましたが、一つ、信頼できる資料を紹介したいと思い



図7 ロシアの18世紀の宮殿音楽

ます。日本人の書いた本です。大黒屋光太夫という人物をご存じの方が多いのではないかと思います。18世紀の終わりごろに、大黒屋光太夫という方が船に乗ったときに、嵐のために漂流して、ロシアの領土に漂着しました。結局、彼は帰国するまでロシアで10年間過ごし、当時のロシアの風俗、文化などを非常に具体的に、真面目に描いています。とても貴重な資料ですし、とても興味深い本です。本といっても、その後で大黒屋光太夫の話聞いた桂川甫周という人物が、大黒屋光太夫の話を書き取って本のかたちにまとめました。この本は今普通に売っています。『北槎聞略』というタイトルです。今でも簡単に手に入ると思います。

この本の中では大黒屋光太夫が自分で描いたバラライカの絵があります(図8)。右側にカタカナで「バラライカ」と書いてあります。大黒屋光太夫が見たバラライカはまだ三角ではなくて、このような形の楽器でした。でも、よく見ると、弦はもう3本です。

次の画像は、19世紀に入って、ロシア人がロシアの民族踊りを描いた絵です(図9)。「ロシア踊り」というタイトルです。1820年代の絵ですが、ここではバラライカはロシアの踊りと歌の伴奏に使われています。ここではもう三角ですが、根っこはすごく細長くて、ボディは小さい感じですね。先ほど見せた二つの画像は、二つともやはりフォークバラライカですね。

そうしたら、もう少しまた音楽ブレイクをしたいと思いますけれども、少しだけまた生で、私がバラライカの演奏をしたいと思います。

(演奏)

クリコフ 聞こえたみたいですね。良かったです。ありがとうございます。これも芸術バラライカでした。

そうしたら、いよいよバラライカの父と言われる人物



図8 大黒屋光太夫の絵、18世紀
出典:桂川甫周(亀井高孝編)『北槎聞略』岩波文庫、1990年、224頁。



図9 民俗バラライカによる舞踊や歌の伴奏

の話に移りたいと思います。バラライカの父、ワシーリー・ワシーリエヴィチ・アヌドレエフという人物がいました。1880年代に音楽界に現れました。この方です(図10)。立派なバラライカを持っています。寿命は短かったのですが、とても尊敬している方です。

バラライカの父と呼ばれていますが、その呼び方をすること自体も実は神話の一つになっていると私は思っています。なぜかと言うと、もちろんアヌドレエフ本人の芸術バラライカとロシア民族楽器の改良に、彼の偉業、



図10 V.アヌドレエフ(1861～1918)



図11 V.アヌドレエフと仲間たち

努力はとても大きかったのですが、彼は一人ではなくて、彼の周りには仲間がいて、皆大変な努力していました。

次の画像はアヌドレエフと仲間たちです(図11)。彼と一緒に精いっぱい、ロシア民族楽器の改良を行った仲間がいました。だから、私はこれから「アヌドレエフたち」とか「アヌドレエフと仲間」という言い方を使いたいと思います。ここからロシアの芸術バラライカが誕生しました。実は芸術ドムラも生まれています。

では、アヌドレエフたちは何をしたかという、バラライカ楽器とドムラ楽器を徹底的に改良しました。そして、ロシア国民に長い間、遊び道具として使われた楽器はバラライカだったか、ドムラだったかも分かりませんが、農民が使った楽器から二つ、全然違う独立した楽器を作りました。ですから、バラライカだけではなく、芸術ドムラの誕生でもありました。

アヌドレエフたちは会議を行い、「これからは、この三角形で、指で弾く楽器はバラライカになります。そして、この半円型で、ピックで弾く楽器はドムラになります。」こんな感じで会議をやって決心しました。その結果、バラライカとドムラが別々の楽器になって、今でも立派に存在しています。

もう一つは、アヌドレエフたちは、この改良された楽器から、この画像に見えるように、最初はアンサンブルをつくり、そして、大きなロシア民族楽器のオーケストラもつくりました。もちろんロシア民族楽器自体を普及させようというのはアヌドレエフらの一つの目的だったと思いますが、それ以上にバラライカなどの楽器を芸術音楽として舞台に出して、聴衆の前で演奏したかったということです。聴衆といっても、今度は農民という階級よりはロシアのツァーリつまり皇帝、皇室、貴族階級の前で立派にバラライカ楽器を演奏したかった、紹介したかったのです。

結局、ご覧のように、ロシア民族衣装ではなくて、黒いタキシードのような服を着て、他のクラシック音楽を演奏する感じで演奏しました。彼らが演奏した曲目はロシア民謡の編曲はもちろん、当時の社交ダンス、ポピュラー音楽、クラシック音楽のアレンジもたくさんありました。その演奏活動は短い間でしたがとても成功して、好評でした。ロシアの最後の皇帝、ニコライ2世の子どもたちと皇室の方々もバラライカとドムラを習ったといわれています。資料が残っているので、それは事実だと思います。

大きなオーケストラをつくるためには、やはり楽器もいろいろな種類も必要ですから、今度は、バラライカとドムラのいろいろな種類を作りました。次の画像(図12)、これですね。バラライカの種類。実はバラライカのオーケストラのために、いろいろな種類を作ったということですね。それもクラシック音楽、クラシック楽器に学んで、小さい楽器からバラライカプリマ、バラライカセクンダ、バラライカアルト、バスとコントラバスという種類を作りました。この写真で一番小さい子が持っているすごく小さい楽器はバラライカピッコロだと私はいますが、このバラライカピッコロは、今はほとんど使われていません。子どもたちが習うときには使われると思います。一番使われている楽器は、私が今日、持っている楽器、バラライカプリマですね。バラライカプリマだけはソロ演奏活動に使われていて、他の楽器は全部、アンサンブルと、特にオーケストラの中で使われている楽器です。だから、オーケストラ用の楽器です。



図12 バラライカの種類



図13 ロシア民族楽器オーケストラ

もう一つ、次の画像（図13）、これは今現在、いわゆるロシア民族楽器オーケストラの姿です。バラライカもたくさん見えると思いますし、ドムラや他の楽器もいろいろあります。弦楽器や、後ろの方はロシアのアコーディオン、いわゆるバヤンというボタンアコーディオンの楽器もあります。演奏者の皆さんはもちろん……。もちろん私は自然に言ってしまうのですが、ロシア民族衣装ではなくて、このような白黒のステージの服装を着ています。蝶ネクタイなどは、芸術音楽を弾いていますという感じがですね。

このようにロシア民族楽器の新しい伝統が始まり、今から見ると、この芸術バラライカは130年ぐらい続く伝統です。まだ若いと思います。アヌドレエフたちは農民という階級だけが知っていた楽器を一時的に借りて、改良して、その結果、できた芸術バラライカを他の階級クラスに紹介しました。

この改良された楽器も今度は農民に戻そうと思ったのですが、戻したかどうか、それは別の話ですが、取りあえず渡そうとしました。そのまま20世紀に入りますが、ロシア全国にバラライカをどうやって普及させるか、いろいろな試みがありました。例えば、戦争のときに兵士たち全員にバラライカを無料で渡され、そのあと戦争が終わったら、皆、それぞれの地方、田舎にバラライカを

持って帰ったことで、バラライカ楽器は普及したのではないかという話があります。確かに新しい改良された楽器は音などの面でも安定していましたから、その楽器を農民たちも使ったと思われます。ただ、演奏したのはもちろん自分の地方のフォークロア音楽です。

ただ、もちろんみんなが農民というわけではなくて、改良された楽器が自分の手になかなか合わない人々は多くいました。加えて、それまでにも同じように自分で好きなようにバラライカを作った人々がいました。ただ、もう何となくバラライカは三角の形に決まっていた。その後は農民が自分で作ったバラライカもやはり三角形になる楽器です。

少しだけ飛ばしてしまいます。

この部分をまとめてみると、ロシアの芸術バラライカが誕生し、フォークバラライカと共に存続するようになり、二つの音楽的伝統は三つのロシアの国、三つの違う政治、経済的制度の下で何とか生き残りました。すなわち19世紀のロシア帝国の帝国主義、ソ連時代になってからの社会主義、そしてロシア連邦の資本主義ですね。

またここで音楽の動画を少しだけ再生させていただきたいと思います。ビデオ4番、動画4番をお願いします。

（動画再生）

ありがとうございます。皆さん、曲目は分かりましたでしょうか。ロシアの曲と日本の曲によるメドレーの一部分でしたね。これは芸術バラライカの演奏ですね。

1917年にロシアで革命があり、国のかたちが変わって、ソ連時代が始まりました。ソ連時代と社会主義の時代になりました。このころソ連はイデオロギーのプレッシャーがとても大きかったのですが、国は文化、芸術や音楽を使って社会主義、共産主義のイデオロギーを国民に積極的に教え込もうとしました。「大衆に芸術を」というスローガンがとても広く使われていました。

そのために、もちろん新しい教育制度が必要でした。全国に文化大学、文化専門学校がたくさんできました。私が卒業したペテルブルク文化芸術大学も昔は文化大学でした。それは芸術のレベルを上げるというのももちろん目的の一つでしたが、やはり主な目的はプロパガンダ、社会主義を国民に広げるというものでした。

もちろん私たち関係者は民族音楽の芸術レベルを高めるといふ活動にできるだけ集中したかったのですが、それはなかなかできませんでした。このように芸術バラライカのイデオロギーシステムは悪用されました。バラライカも純粋な遊び道具ではなく、イデオロギー道具の一

つになりました。

国はもともとフォークロア音楽、農民の文化は下品で価値のないこととみなし、新しいレベルの高い民族音楽を必要としました。とても簡単に言うと、フォークバラライカを芸術バラライカに差し替える。昔のフォークロアの歌を新しいロシア民謡に差し替えるということです。それ以来、芸術バラライカの関係者はフォークバラライカの存在のことをほとんど意識しなくなりました。

一方、フォークロアバラライカの関係者は今でも芸術バラライカのことや、アヌドレエフたちのことをとても嫌がっています。私は芸術バラライカの伝統を受け継いでいますが、フォークバラライカの伝統の存在も今、意識して、とても尊敬しています。ただ、ロシアにいたときは、そのことをまだほとんど知りませんでした。日本に来て、研究活動を始めてから、そのようなフォークバラライカの存在に気が付きました。

その後 1990 年代にソ連が崩壊し、それまでの非常に厳しいイデオロギーの傘も全て消え、それと同時に国からの文化芸術関係者へのサポート、支援が一時的に完全になくなってしまいました。とても大変な時期でした。または民族音楽の演奏者にとっては、お金がなくなったことよりも、ロシア民族音楽が全て、マスメディアからほとんど消えたということが大きな問題でした。

今、資本主義のロシアは、実はまだすごく若いですね。30 歳になって、やっといろいろな面で安定してきました。芸術バラライカの関係者はずっと演奏活動、教育活動に集中しており、まだフォークロアバラライカの関係者とはほとんど交流していません。田舎の音楽文化の状態にほぼ何も関心を持っていません。むしろ自分たちは芸術音楽の世界に入っていると思って、いつもクラシック音楽の関係者と精いっぱい交流しようとしています。

芸術バラライカの世界は、実は割と狭いです。広くはありません。生でバラライカの音を聞いたことがある一般のロシア人はあまりいません。今の時代、多くがオンラインになった今日でも、SNS や YouTube などがあっても、わざわざ調べないと芸術バラライカを見る、聞くチャンスはありません。日本も少し似ていると思いますが、琴とか三味線の音は興味があつて、わざわざコンサートに行かないと聴くことはできません。

一方、フォークバラライカの面でも、フォークバラライカを好きで、それをロシアで普及させようと思っている若いロシア人も増えてきました。そして、彼らはフォークバラライカの博物館を作ったり、バラライカ教室、工房、楽器を作ったりして、様々なグッズを作っ

てるまで活動が広がっています。フォークバラライカの楽器としてはブランドもできています。バラライキヤル（Балалайкер）という楽器の名前があります。割と安いので、結構売れています。芸術バラライカでは、いい楽器はとても高いです。

それでは、大事なことを、時間がなくなる前にどうしても言いたいと思いますが、芸術とフォークバラライカの伝統の違いと共通点について言いたいと思います。

フォークバラライカは、現在、バラライキヤルという名前の会社を作っています。全体的に見ると、楽器の形と大きさはほとんど同じなのではないかと思っている方がいらっしやると思います。全体的にはそうかもしれませんが、具体的にみると、構造での違いがとても多いです。まず違いについて言いますと、楽器の細かい構造が違います。楽器に使われた素材、弦の素材、調弦が違います。芸術バラライカは弦の調弦は一つしかありません。それはずっと決まっていて、ほとんど変わっていません。逆にフォークバラライカは地方によって調弦が違います。演奏者が自分の好きなように調弦します。調弦は目的によって変わります。

楽譜も違います。演奏する音楽、レパートリーももちろん違います。演奏する場所も違います。演奏形態も違います。演奏の目的、楽器の持ち方、楽器の弾き方、教え方、習い方、楽器に関する考え方、使う衣装、服装、楽器の値段も、違いはとても多いです。

加えて、私が考えた基本的なイメージ、アイデンティティの違いとしては、フォークバラライカはトランスミュージックに近いと思います。芸術バラライカは他のクラシック音楽と同じように発展というイメージ。だから、音楽はどんどん変わっていったって発展するというイメージが強いと思います。だから、発展対トランスですね。

共通点としては、バラライカの形が、胴は三角ということと弦は 3 本。あとはバラライカが一番基本的なその技法です。ロシア語でブリャーツァニエ（бряцание）¹と言いますが、私はそれに日本語で「振り打ち」という名前を付けました。その 3 本をはじくという基本的な技法は同じだと思いますが、その後は全部、違います。

芸術バラライカ教育について一言言いますと、芸術バラライカ奏者は、プロになるためには長い間、専門教育を受けなければなりません。その専門教育は他のクラシック楽器と同じです。ピアノとかバイオリンと同じぐらいの時間がかかりますし、同じ教育を受けています。

¹ 金属製の音を出す、鳴らすの意味

この専門教育はクラシック音楽の音楽理論に基づいています。この教育のために、ロシアではソ連時代から音楽教育制度、システムができていて、今でもほとんど変わらない同じシステムが存在しています。

この音楽教育制度は三つの段階からなっていて、まず子どもたちは音楽学校に少なくとも5年間通います。音楽学校と言え、日本では音楽大学のことになりますが、ロシアでは音楽学校というのは大学ではなくスクールを指します。私も8歳のときからこの学校に通っていました。午前中は普通の小学校に通い、午後になると音楽学校に通います。それを少なくとも5年間続けます。そうしたら短期大学、音楽カレッジに移って、4年間、勉強します。その次の段階が音楽大学か音楽院です。モスクワ音楽院ではバラライカは教えていませんが、ペテルブルク音楽院にはロシア民族楽器科があります。ここでもまた短くとも5年間、勉強します。このように、長い時間と大きな努力が必要です。ソ連時代にはまだ民俗バラライカだけでなく、芸術バラライカのアマチュア活動もあり、アマチュア奏者からなるオーケストラとアンサンブルがたくさんありました。現在ではかなり少なくなっていると思われます。

次は芸術バラライカのレパートリーについてですが、何の曲を弾くかがバラライカのイメージに影響します。バラライカをロシアの中で弾くか、海外で弾くか。それによって演奏する曲は違います。

「バラライカの奏者のイメージ、ロシア国内」というスライド、画像があります。だから、ロシア民族衣装を着てロシア民謡を演奏するというパターンは、ロシア国内ではなくて、大体、海外で演奏するときのものです。ロシア国内では、この姿でバラライカ奏者が演奏します(図14)。次の画像は私が日本で撮った写真ですけれど



図14 バラライカ奏者の姿、ロシア国内

も、こんな感じで私はよく日本で演奏する感じですね(図15)。

どこで演奏するか。それによって、曲目、レパートリーは違います。簡単に言うと、ソロ、アンサンブルかオーケストラでロシア民謡と民族舞踊の伴奏をするときは、ロシア民謡の編曲をやります。とても簡単な初心者向けの曲でも、関係者以外の人には、それはフォークロア音楽、民族音楽と思われていると思いますが、実はこのアレンジもやっぱりヨーロッパのクラシック音楽理論に基づいてアレンジした曲です。簡単な曲は全てがフォークロア音楽であるというわけではありません。多くのクラシック音楽の編曲、名曲をバラライカで弾きます。他の民族音楽の編曲、特にジプシー音楽、イタリア、スペイン、東ヨーロッパの音楽のアレンジもよくバラライカで演奏します。バラライカのためのオリジナル曲も、今、たくさん作られています。ソナタもあるし、協奏曲、あとはオーケストラとシンフォニーオーケストラとのバラライカのソロの曲もたくさん出ています。

バラライカが使っている楽譜は他のクラシック楽器が使っている普通の五線譜の楽譜になります。楽譜は今、



図15 バラライカ奏者の姿、海外

とてもたくさん出ていますし、ロシアのインターネットでほとんど、どんな曲でもダウンロードして見つけることができると思います。

また、演奏形態、演奏編成ですね。これはソロの演奏でも、ソロといっても、先ほどのビデオで私はピアノと一緒に演奏したのですが、それもほとんどソロといえます。ほとんどのバラライカの演奏に、伴奏としてピアノが入っています。時々、アコーディオンも入っています。

ソロの次はアンサンブル。これはロシア民族楽器だけからなっているアンサンブルもありますし、いろいろな編成、いろいろな違う国の楽器とバラライカが合奏することもあります。ロシア民族楽器オーケストラは先ほどの写真にもありましたし、このオーケストラは今、ロシア国内だけではなくて、アメリカやヨーロッパの国にはたくさんあります。実は日本にもあります。東京だけでも二つのロシア民族アンサンブルが存在します。東京バラライカアンサンブルと、あとは北川記念ロシア民族楽器オーケストラもあります。

最後に日本におけるバラライカの活動について少し話します。先ほどの二つのオーケストラに加え、プロのバラライカの奏者として活動を行っている日本の方がいます。北川翔という方で、彼は昔、ロシアの国際民族楽器コンクールで外国人として初めてバラライカの演奏で賞を取った方です。私も小さいアンサンブル、「ガルモシカ（Garmoshka）」というアンサンブルをやっています。バラライカ、アコーディオン、トランペットとロシア民族舞踊の2人で、全員ロシア人で活動をしています。今年はコロナで公演はすべて中止になりましたが、モスクワのバラライカ奏者の支援を受けて、毎年夏、東京でバラライカまつりを行っています。最後に去年のバラライカまつりの動画を少しだけ見せさせていただきたいと思います。

(動画再生)

クリコフ 時間を過ぎてしまいましたが、最後に一言だけ結論をまとめます。

ロシア国内でも芸術バラライカのイメージは、堅苦しく古いものだと私は思っています。現在でもまだこのイメージはそんなに変わっていません。バラライカの文化的アイデンティティ、ステータスはまだ不安定です。これは芸術バラライカのことですが、バラライカ関係者は自分の芸術レベルが完全に芸術音楽の世界に入っていると思っています。一方ではロシア民族音楽というカテゴリーにも入っているんです。まだ変わっている途中で、伝統としては若いので、安定するにはまだまだ時間がか

かかると思います。

皆さんからいろんな質問が来るとは思いますが、それに答えたいと思います。取りあえずちょっとこんな感じで、ざっとしゃべって、これで終わりたいと思います。長い間、ありがとうございました。

梶山 クリコフさん、みんな聞いたことはあっても詳しくは分かっていないバラライカについて、その成り立ちから歴史、カテゴリー、現在の状況までよく分かるお話をありがとうございました。

それでは、質疑応答に移りたいと思います。何か質問のある方は挙手をしていただくか、もしくはビデオをつけて、ミュートを外してお話してください。家事、育児をしながら聴いておられる方もいらっしゃると思いますので、そういう場合はチャットで書き込んでいただいても結構です。

A すいません。よろしいでしょうか。

梶山 はい、どうぞ。

A 音声のみでも大丈夫ですか。

梶山 はい、大丈夫です。

A 興味深い講演と素晴らしい演奏を聴かせていただき、ありがとうございました。その中で少し気になったことがあったので、質問させていただきたいと思います。

ロシアの民族楽器のバラライカやドムラが三角形の形で弦が3本の状態で現在に受け継がれてきたというのをお聞きしたんですが、弦が3本というのには何か理由があったりするのでしょうか。

クリコフ ご質問、ありがとうございます。そうですね。弦が3本というのは私たちにとってはもう当たり前のようになっているので、意外な質問です。

昔は、バラライカの弦は地方によって本当に様々でした。様々といっても、もちろん1本以上はあったわけですが、2本のバラライカがとても多かったと思います。それから3本、4本。今でもフォークバラライカを作っている人たちは、マンドリンのように4本のバラライカを作ったり、6本のバラライカを作ったりしています。自分のニーズや目的に合わせて作ります。

だから、芸術バラライカになると、アヌドレエフと仲間と一緒に集まって会議というか、恐らく長くいろいろとお話ししていたと思います。「取りあえずこんな感じにしましょう」と、みんなが決めたわけですね。「これからバラライカの弦は3本で、三角で、こんな感じで、この形に決めましょう」という感じでみんなが自分で決めていたわけですね。

A なるほど。ありがとうございます。

梶山 ありがとうございます。チャットの方でも質問が来ているので、拾ってみたいと思います。本学の学生の方でしょうか。Bさんから「クリコフさんはなぜ日本の楽器を研究しようと思ひになったのですか」という質問が来しています。

クリコフ 私は、個人的には尺八という楽器に興味があって、まずはそれを吹いてみたかったのです。ただ、その楽器を習うだけで日本に行くのはとても大変だったので、まずは研究者になって、ロシアの文化芸術大学から日本の藝大に移って、日本の伝統音楽を研究しながら、個人的に和楽器の師匠のところに通っていました。最初はお琴もやりましたし、三味線も習ったのですが、やはり一つの楽器に、尺八に集中して、7年間ぐらい稽古を受けてみました。やっぱり音自体に興味がありましたし、やはりその時私は日本の伝統文化や、禅文化、呼吸などの方法にすごく興味を持っていたので、尺八を吹きたかったのです。

今はもう完全にロシア民族楽器に、バラライカに戻っています。

梶山 ありがとうございます。他に質問のある方はいらっしゃいますか。

野見山瞳（日本財団国際事業部） すみません。日本財団の野見山瞳です。質問をよろしいでしょうか。

梶山 はい、どうぞ。

野見山 すみません。よろしく願いいたします。バラライカとは関係がないかもしれないのですが、日本だったら、例えば学生さんと小学生からリコーダーとかハーモニカとか、そういう楽器が身近になってくると思うのですが、ロシアの場合、そういった幼少期の子どもたちにとって一番身近な楽器はどのようなものになるのでしょうか。

クリコフ ご質問、ありがとうございます。私は先ほどロシアの音楽教育の教育制度について少し話をしました。ロシアの一般、義務教育について、もちろん何も話ませんでした。私はもう現在のことはよく知りませんが、結論から言うと、ロシアの学校は簡単に言えば、多くの学校は音楽の授業を無視しています。普通のロシアの学校で、小学校、中学校、高校では音楽の授業はありますが、それは日本と違って、楽器に近づく、楽器に触る機会はほとんどありません。

それから、普通のロシア人は歌も歌いませんし、あとは五線譜を見て、何も分からないという感じですね。簡単に言うと、小さいころからの音楽教育の機会自体は学校とは別に、義務教育の外でたくさんありますから、音

楽をやりたい人は私みたいにそこに行きます。学校の中ではほとんど何もやっていないので、普通のロシア人では、楽器を一生触らない人も多いとは思っています。

野見山 ありがとうございます。何か日本だったら、吹奏楽部があったりとか、ギターとかバンドがあったり、学生でやったりとかすると思うんですけど、そういうのがロシアにはないという感じなんじゃないかな。珍しいというか。

クリコフ そう、珍しいと思います。ただ、私はもうロシアのここ20年くらいの教育の現状は調べていないので、学校によって、大きな町の、市立でなく、私立学校とか何か立派な学校の中では何か音楽クラブがあるかもしれませんが、国立の小、中、高校は、音楽クラブのような、何か楽器に触る活動はほとんど行われていないと私は思います。合唱、歌の教育、音楽教育もほとんど行われていません。それはとても残念ですが、日本との大きな違いだと思います。

野見山 大変興味深いです。ありがとうございます。

クリコフ いえ、ありがとうございます。

梶山 ありがとうございます。今日はロシア関係者や音楽研究の関係者も多数聴講されておりますけれど、いかがでしょうか。ではタスタンベコフ先生、どうぞ。

タスタンベコフ・クアニシ（筑波大学人間系助教） すみません。クリコフさん、お久しぶりです。タスタンベコフ・クアニシです。

クリコフ お久しぶりです。

タスタンベコフ 私もカザフの伝統楽器のドンブラを弾きます。先ほどのご質問と関連するんですが、例えばカザフスタンではソ連が解体して、いわゆる民族が独立したという気持ちというのがすごく湧いてきて、そこでドンブラの人气がすごく高くなったということと、あとは昔の例えば曲を現代風にアレンジして、もう本当に若者の聴くような音楽にアレンジして、最近、すごくいろんなところでやっています。例えば今、有名なディマシュ・クダイベルゲンもそういうサウンドを使いますし、それはバラライカについてはいかがですか。現代風にバラライカの曲、あるいはロシアの昔の曲をそういうふうに変えようということがあるんですかね。

クリコフ 質問ありがとうございます。今日も少し、話の中で出たのですが、世界的に知られているロシア民謡というのは、実は一番古くても19世紀の終わりごろにちゃんと作られたものですから、フォークロアの音楽ではないですね。ただ、今は一般的には民謡とされても、バラライカで演奏するときには、メロディーだけを弾く

のはもちろん面白くないので、やはりアレンジが必要で、そのアレンジ方法はやはりクラシック音楽の音楽理論に基づいています。

だから、今日、最初にすこしだけ見せた動画は、本当のフォークミュージックの少し動画があって、ロシア語でナイグルイッシュ²という言葉を使っていますけど、ずっと似たような旋律パターンを繰り返していて、また聴いている人は全く同じように聴こえるのですが、実は少しずつ変化しています。こんな感じで、もう1時間、2時間ぐらいでも演奏できるのです。これはやっぱり私たち、芸術バラライカにとっては、それはもう舞台音楽と違いますから、長い間、聴くのは難しいので、聴いている人が面白く聴けるようにアレンジします。

それから、アレンジは全部、クラシック音楽理論に基づいていますが、アレンジしたい曲は何でもあります。古い曲もあるし、現代曲もあるし、今、何でも弾けます。ジャズも弾いているし、もう何でも。弾きたい曲があったら、少し試して、かっこよくなると思ったら、自分でアレンジして何でも舞台に出します。

タスタンベコフ なるほど。ありがとうございます。そういうアレンジが若者の関心を引きつけるのではないかと思います。ありがとうございます。

クリコフ そうですね。ありがとうございます。

梶山 では、クリコフさん、チャットで質問が来ているんですけど、東京藝術大学でカザフ音楽を研究されている東田範子さんから。最初のビデオで流れた曲は「カチューシャ」と「Каникулы любви³」ですよね。この二つの曲は、要するによくみんなが知っているような曲ですよね。ロシアのコンテキストでは、こういう芸術音楽であつても大衆的、みんなが知っているような曲ということですかね、そういう要素が重視されているように思いますが、どうでしょうかという質問が一つ。

クリコフ そうですね。音楽をどのように、どんな立場からカテゴリゼーションするかということは、もう言葉のレベルでちょっと迷ってしまう可能性があるのですが、先ほど私は民族音楽といっても、簡単に言えば、ロシア民族音楽というのか、ロシアナショナルミュージックというのか、ロシアの中で存在する全ての楽譜もロシア民族音楽と言ってもいいですけど。

それから芸術音楽という側面から見ると、プロの芸術バラライカ奏者が演奏する全ての音楽は一応、芸術音楽

ですね。だから、その中にポピュラー音楽はレパートリーの一部分として、もちろん入っています。同じコンサートで、同じプログラムで、例えば1時間ぐらいのプログラムで1曲はクラシックの古い曲のアレンジをやって、次の曲はジャズの曲をやって、次の曲はポピュラー。映画音楽からのアレンジをやって、最後にロシアの古い民謡のアレンジをやる。これは全部、同じコンサートでやりますけれども、それも全部、面白く聴かせるといった目的はもちろんあります。

梶山 もう一つ、東田さんからの質問よろしいでしょうか。芸術バラライカと「発展」の関連についておっしゃっていましたが、芸術バラライカ音楽では調性音楽・西洋和声・定拍リズムの枠を守ることは依然として重視されていると思いますが、いかがでしょうか。

クリコフ そうです、そうです。今日はいろいろな方が講演会を聴いていらっしゃると思いますから、もうできるだけ私の簡単な日本語で説明したかったのですが、全体的に私は西洋音楽理論、もちろん理論といっても、調和もそうですし、和声の使い方のリズム感など、全部それに従ってアレンジを作っています。

梶山 ありがとうございます。チャットでもう一つ、質問が来ているので、拾いますね。野見山さんから「クリコフさんが音楽に興味を持たれたきっかけや理由などについて、聞かせてもらえますか」という質問が来ています。

クリコフ すごいご質問ですね。どこか藝大のオンライン雑誌に私の記事があると思います。私は「音楽と付き合い」⁴という記事を結構前に書いたのですが、生まれて依頼、私と音楽との付き合いは割と複雑で、最初から音楽が好きだったわけではないし、小さい頃から音楽学校にいて、最初、少しギターをやったり、ドムラをやったりしました。バラライカを初めて見たのはもう短期大学、音楽専門学校に15歳で入ったときでした。それまでは小さい頃からずっとドムラを弾いていました。

音楽をずっと小さい頃からやっていたのですが、好きだったわけではないんです。何となくやっていましたが、本当に好きになったのは多分、日本に来てから、10年ぐらいかなと思います。何となく続けていた感じです。きっかけはもう分からないですね。少しずついろいろやって、やっと「ああ、好きかも」という感じになりました。

梶山 クリコフさん、藝大の記事をちょっと今、探してみて見つけたので、チャットのところに貼り付けて大丈夫ですか。

² ロシア語でメロディー、伴奏の意

³ ザ・ピーナッツ歌唱の日本の歌謡曲「恋のバカンス」のロシア語版。ロシアのラジオ放送で紹介され、同国でも大ヒットした。

クリコフ 見つけましたか。へえ、すごい。

梶山 はい。すぐ出てきたので、じゃあ、貼り付けちゃいますね。これを読んでいただければ分かります。

クリコフ そうですね。ありがとうございます。

梶山 では、もう終了の時間になっていますが、もう1名くらい、いかがでしょうか。どうしても聞きたい質問などあれば、受け付けたいと思いますが。皆さん、遠慮されていますかね。音楽に造詣の深い、プロジェクト教員の山本先生に話を振ってみましょうか。

山本 クリコフ先生、今日はどうもありがとうございます。大変、素晴らしい演奏も織り交ぜていただいて、楽しませていただきました。アットホームな感じで良かったと思います。

クリコフ ありがとうございます。

山本 今回、フォークバラライカと芸術バラライカのお話を二つ織り交ぜていて、それでクリコフさんは芸術バラライカの方のご専門ということで、もしかしたら詳しくはご存じないかもしれないんですけども、フォークバラライカというのは農民の音楽ということでおっしゃっていたんですが、実際、農民の人たちはバラライカというのをどんなときに、どういうかたちで演奏していたのかなと思ったんですね。例えば収穫後のお祭りで使うものなのか。それともあとは農作業の合間で、ちょっとリフレッシュするときに使うのか。

こういったフォークの楽器ですと、例えばハーモニカなんかだと、やっぱり奴隷たちが日々の苦しい農作業の合間に解放されるために、魂の叫びとかいうものを持った役割というのがあったと思うんですが、実際、フォークバラライカというのはどんな役割を果たしていたんでしょうか。

クリコフ ご質問、ありがとうございます。実は私のやり方は、いつも発表の準備をするときには必要以上に3倍ぐらい、いろいろ準備をして、今日も3分の1しか準備していたことは間に合いませんでしたが、話の中では、実はバラライカの研究者について少し話したかったです。

実はフォークバラライカを研究する日本の方がいます。民俗バラライカの歴史研究などにその方の貢献がとても大きいと私は思っています。柚木かおりさんという方です。柚木さんは長い間、ロシアでフィールドワークを行い、フォークバラライカの20世紀の現象の変わり方などをとても詳しく研究しています。日本語でも『民族楽器バラライカ』という本が出ています。

あとは、ご質問に戻りますと、今日の話の中でも少し

だけ触れたと思いますが、フォークバラライカの弾き方、いっとうやって弾くかということは昔とほとんど変わっていないですね。だから、農民たちの遊び道具という感じで、農民たちは600年前も、300年前とか今でもあまり変わりなくとても忙しく働いているということで、だから、楽器などを休むときに、自分のために使っているということですね。

もちろん曲目自体は少し変わりましたが、今、フォークバラライカの研究者が、昔の旋律も弾いています。20世紀のロシアのポピュラー音楽とか、いわゆる20世紀に作られた新しいロシア民謡も今、すごいポピュラーミュージックになっていますので、それも自分の好きなように適当に弾いたりします。

もちろん祭りなどもそうです。基本的には、フォークバラライカというのは、田舎では、仲間はみんな、音楽に参加するということで、舞台音楽ではなく、みんな、仲間が集まって、一人はバラライカを弾いて、もう一人は踊って、もう一人は歌って、みんな、参加するという活動ですね。その前から見ると、今も16世紀も18世紀もほとんど変わっていないと思います。

山本 ありがとうございます。

クリコフ ありがとうございます。

梶山 ありがとうございます。では、プロジェクト責任者の白山先生、もうそろそろよろしいでしょうか。

白山 はい、よろしいかと思います。素晴らしいお話と演奏をありがとうございます。大変に勉強になりました。

梶山 それではお時間になりましたので、そろそろ終了したいと思います。NipCAプロジェクトでは来月以降もどんどん講演を行っていきますので、今後どうぞよろしくお願いいたします。それでは……。あ、ベントン副学長、何か一言いただけますでしょうか。

ベントン・キャロライン（筑波大学副学長（国際担当）・理事） どうもクリコフさん、ありがとうございます。ベントン・キャロラインです。とても面白かったです。

クリコフ ありがとうございます。

ベントン 私は民族については勉強不足なんですけど、今日は本当に興味深く聴いて、いろいろと今後も勉強していきたいと思いました。

ちょっと質問なんですけど、クリコフさんはロシアの民族の楽器とか民族のフォークの芸術を勉強していて、長い間、日本にいて、日本の多分、民族の芸術に触れたりしていて、その特徴の違いはあるんですか。特徴の違いがあれば、やっぱり歴史に関わってくると思うんですが、一番の違いは何だと思います？

クリコフ ありがとうございます。その質問だけでももう1時間ぐらいいしゃべってしまうと思いますが、一言で言えば、今日、少しだけ話しましたが、日本では伝統を保存するという文化的な制度、文化的な特徴が昔からありますから、それぞれの共同体が多く存在して、その共同体はそれぞれの自分の対象になった芸術を一生懸命、守っています。それは伝統音楽、古典音楽だけではなくて、日本のそれぞれの地方の民謡とか、神楽とか、いろいろなものをこんな感じで、共同体が生き残る間に守っていますが、ロシアではこのような家元制度などの保存会という組織はありませんでした。

それは面白い話なのですが、実はみんな、結構、ばらばらで、同じことを一緒に長くやる、長く保存するという文化的な組織はできていません。それは日本との一番大きな違いだと私は思っています。

ベントン どうもありがとうございます。本当に今日はとても楽しかったです。ありがとうございます。

クリコフ ありがとうございます。

梶山 ベントン先生、ありがとうございました。

本日はZoomということで、私とクリコフさんは高い音が聴こえるように、打ち合わせを何回も繰り返したんですが、やっぱり生の演奏にはなかなかZoomは難しいですね。

クリコフ そうですね。

梶山 その代わり、ビデオをいろいろ見せたりといった工夫をしました。クリコフさんも今、こういう状況で公演が難しいと聞いておりますが、ぜひ状況が落ち着いたら、皆さん、コンサートに足を運んでいただけたらと思います。

それでは、本日はこれで終了したいと思います。皆さん、各自、ご退室いただくかたちにしましょうか。本日はどうもありがとうございました。

クリコフ 私からも、本当に梶山先生にも、このプロジェクトに関わる全ての方々に、このような講演会に出演する機会をくださり、本当にもう感謝しています。

筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」主催
公開講演会シリーズ「中央ユーラシアと日本の未来」
ロシアの文化的アイデンティティとしての楽器「バラライカ」
ロシア民族音楽教室「マキシム」主宰 クリコフ・マキシム

2020年9月15日

監 修 臼山 利信
編集・校正 梶山 祐治 (主担当)、山本 祐規子、谷越 祥子、笹山 啓
発 行 者 臼山 利信
発 行 所 筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」
茨城県つくば市天王台 1-1-1
Tel: 029-853-4251
E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp
Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>
印刷・製本 株式会社アイネクスト



筑波大学「日本財団 中央アジア・日本人材育成プロジェクト (NipCA)」

〒305-8571 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学

Tel. 029-853-4251

E-mail: info@genis.jinsha.tsukuba.ac.jp

Web: <https://centralasia.jinsha.tsukuba.ac.jp/>

12 つくる責任
つかう責任



公開講演会シリーズ第12回のテーマカラーは、国連が定めた17の「持続可能な開発目標 (SDGs)」のうち、「目標12. 持続可能な消費と生産のパターンを確保する」のアイコンの色を基調としています。